

明の对外政策と冊封国暹羅

——万曆朝鮮役における借暹羅兵論を手掛かりに——

木村 可奈子

はじめに

豊臣秀吉による文禄・慶長の役は、日本と朝鮮の歴史を述べる際避けては通れない歴史的事件である。朝鮮史では壬辰・丁酉倭乱、中国史では万曆朝鮮役と呼ばれる一五九二年と一五九七年に行われたこの侵略戦争は、単に日本と朝鮮の二国間関係の上で起こった事件ではなかった。西嶋定生の「冊封体制」論や、フェアバンクの「中華的国際秩序」⁽¹⁾などでも知られるように、清代まで中国は、冊封・朝貢関係による中国を中心とする世界秩序を想定していた。明朝にとって朝鮮は中国の世界秩序に従う最も恭順な冊封国であり、秀吉の「征明嚮導」を掲げての朝鮮出兵は中国が想定した国際秩序への挑戦を意味した。藩屏である朝鮮へ援軍を送らねばならなかった明は、同時に起こっていたボハイの乱、楊應龍の乱と共に「万曆三大征」と呼ばれたこの戦争によって、王朝の衰退に拍車をかけることとなる。

明朝の对外政策の特色は、海防、海外貿易の統制および国際秩序の維持のために、海禁政策と伝統的な朝貢制度

とを結合させた点にある。明は民衆の出海と民間貿易を禁止したので、正徳四年（一五〇九年）に広州への外国商人の入港を認めるまで、明との貿易は公的には朝貢という形でしか存在し得なかった。⁽²⁾ そのため、貿易の利を求めて多数の国々が新たに冊封を受け入れ朝貢を行うようになったが、明朝の対外積極政策が終わると徐々に朝貢に訪れる国の数は減り、朝貢頻度も下がっていった。

東南アジアの冊封国である暹羅（シャム、この時代はアユタヤ朝⁽³⁾）は、『明史』巻三二四、暹羅伝（以下『暹羅伝』）によると、洪武三年（一三七〇年）に招諭されたことを機に翌年国王が遣使し、洪武十年（一三七七年）の王子の入貢に際して洪武帝より「暹羅國王之印」を与えられ、冊封国の一つとなった。従来の研究では、漢字や儒教文化を共有しない東南アジアの国である暹羅は、「冊封国」といえども朝鮮、琉球、安南と異なり、中国を中心とした東アジアの世界秩序に政治的影響を受けているとはみなされず、明と暹羅の冊封関係は、中国史においても、シャム史においても、貿易のためと捉えられてきた。⁽⁴⁾ しかし『暹羅伝』の中に、この冊封関係の定説に疑問を投げかける興味深い記述がある。

（万暦）二十年、日本が朝鮮を破ったころ、暹羅がひそかに軍隊を出して日本を直接攻め、その背後を牽制したいと願い出た。兵部尚書石星はこの請願を聞き入れようと計らったが、両広督臣蕭彦は不可を主張し、そこで中止となった。⁽⁵⁾

日本の朝鮮侵略に際し、暹羅が日本に対する出兵を明朝に請願してきたというのである。このことは『明實録』万暦二十一年（一五九三年）正月辛酉條の総督両広都御史蕭彦の上奏からも窺える。

総督両広都御史蕭彦が「暹羅は西の果てにあり、日本を去ること万里を越えます。近頃（暹羅からの）貢使があり、兵部に勤王を行うことを願っています。兵部は、発兵して直に日本を攻撃するよう議覆いたしました。しかし海路があまりにも遠く、夷狄の心中は測りがたいので、兵部の覆奏案を取りやめていただけるようお願いいたします。」と上奏した。兵部が議論するに、「関白は卑しい身分の賊でありながら篡奪し、淫虐奸狡にも諸国を脅かしております。今また朝鮮を占拠し、密かに中国国内を侵略することを図り、王師を出動させるまでとなりました。そこで暹羅の貢使はこの不道に憤り、勤王の忠を行い、さらに恤鄰の義も篤くしております。臣等がとりわけ暹羅に出兵させることを請うのは、一には遠邦を励まし、一に倭衆を牽制するためです。そもそも兵術家というものは、言うまでもなく、様々な手段でいかに相手を誤らすかです。決して堂々たる中国が島夷の力を持つということではありません。明旨の『その忠義を嘉した上で、時局の動向を重んじ、督臣の酌議を待ち、（暹羅から）回文を得てから、勅書を出すべし。』とは、陛下の深識遠見が浮かび上がってくるようです。今督臣は南方の辺境の地を治め、海上の国々の機宜について知ること、掌を指すが如くです。まさにこの上奏、並びに議論をよく調査させ、既に本部が派遣している官員全てを、督臣の今後の判断に従わせませし（官員が）既に暹羅に到っているならば、すぐに忠勇の顯官を派遣し、暹羅国王に檄を伝え宣諭し、明旨に従い舟師を準備させます。回文が来れば報告を奏上させます。さらに、勅書が来る日を待つて従うよう実行させます。」これに従った。⁽⁶⁾

この『明實録』の記事は、シャム史において注目を集めてきた。当時のアユタヤは、一五六九年から一五八四年

までビルマのタウンギー朝の属国となっていたアユタヤに独立をもたらした救国の英雄ナレーズエン大王の時代であり、請願が行われた一五九二年は、未だビルマとの対決に決着がついていない時期であったためである。この記事を以って石井米雄は、ナレーズエンの対外関心の強さ、対外情報網の大きさ、日本遠征を申し出られるほどの強力な軍勢力を保有する証拠とし、ウォルタースは、不可解なナレーズエンの行動の背景にアユタヤの世界認識と東南アジアの外交思想を見出そうとした。⁽⁸⁾ 中国史の観点から見ると、中国の藩屏である朝鮮を侵略する日本に対して出兵をしたいと暹羅が請うのは、あたかも暹羅が「中華」である明に冊封国として忠実に従っているかのようであり、「貿易のための朝貢」という定説に反している。しかし、管見の限りこの出来事に対して明側の視点からの実証的研究はない。

先に結論を述べると、ナレーズエンによる出兵の請願は事実ではない。この出兵請願の背後には明側の意図が大きく働いていたのである。本稿では、中国の想定した国際秩序の危機である日本の朝鮮出兵という事件において、暹羅の出兵請願の経緯を検討することで、十六世紀後半における国際秩序の変容に対して明朝が取った対応、そして、従来十分には検討されてこなかった、明にとつての冊封国暹羅の存在意義を明らかにする。

第一章 万曆朝鮮役における冊封国暹羅

第一節 陳奏使の派遣と暹羅の出兵請願

釜山が日本軍に侵略されたのは、万曆二十年（一五九二年）四月十三日のことであつた。⁽⁹⁾ 破竹の勢いで進軍する

日本軍により五月三日京城が陥落し、朝鮮国王は平壤まで逃げることとなる。⁽¹⁰⁾ 日本軍の釜山上陸の第一報が北京に届いたのは五月十日のことであつた。⁽¹¹⁾ その頃、遼東から北京にかけて、「朝鮮が日本と結託し、兵禍を被つたと嘘を述べ日本の征明を嚮導しようとしている」といった流言が流れており、兵部尚書石星が真偽を確かめるために遼東鎮撫使を派遣したのみならず、後に派遣された明人も、朝鮮と日本が結託しているのではないか、という疑心を常に抱き続けた。⁽¹²⁾

明は六月二日、遼東から三千人を発兵し、副総兵祖承訓らに朝鮮を応援に行かせた。⁽¹³⁾ 二十七日には、兵部が文武大臣各一員を朝鮮に派遣することを請うも、科道官の批判にさらされ、翌月の七月二十六日になつても誰が派遣されるか決まらなかつた。⁽¹⁴⁾ その間戦局は悪化し、平壤は六月十五日に陥落、朝鮮国王は明との境界に近い義州まで逃れた。⁽¹⁵⁾ 日本軍を軽んじ、朝鮮側の忠告を無視した祖承訓は、七月十七日黎明に平壤を攻撃するも敗退する。⁽¹⁶⁾ この報告が北京で議論に上つたのは八月五日の事であつた。⁽¹⁷⁾

石星が日本との交渉のために、倭情に通じているという沈惟敬を朝鮮に派遣したのはこの頃である。八月十七日に沈惟敬と会談した朝鮮国王は、彼の言に不信の念を抱き、確実に大軍を派遣してもらうために、鄭崐壽を陳奏使として派遣する。⁽¹⁹⁾ 幸いにも燕行録『赴京日録』、状啓、呈文などを収録する鄭崐壽の文集『栢谷集』が現存しており、明との交渉を詳細に知ることができる。

『赴京日録』によると、八月二十五日に義州を出た鄭崐壽一行が北京に到着したのは、九月十八日のことであつた。夕刻会同館に到着した一行は、会同館副使施允濟らと会う。施允濟は石星と同郷故に親しいと述べ、⁽²⁰⁾ 以後石星

との交渉窓口となる。翌十九日、施允濟は上奏文をまず石星に見せるよう要請する。鄭崐壽は未だ皇帝に上奏していいことを理由に断り、逆に石星との会見を嘆願し、一刻も早く直接交渉の席に着こうとした。翌二十日、一行は午門に行った後、礼部に挨拶に行く。この日の條には暹羅国使臣と会ったことも記されているが、邂逅の詳細は書かれていない。

暹羅が日本への出兵を請願した、という直接の記事は『明實錄』にも『赴京日録』にもない。しかし、朝鮮人申吳の『再造藩邦志』にはその経緯が詳しく伝えられている。

この時天朝はまさに朝鮮への援軍について話し合っていた。ちょうど暹羅国の使臣が来貢しており、この議論を知り、倭国の兵を滅ぼすことを手伝いたいと望んだ。兵部はそこで、提督主事からの掲報により「暹羅国王使握叭喇が兵を率い、倭の本拠地を壊滅させることを願うとのこと。どのように対処すればよろしいでしょうか。」と上奏した。聖旨を奉じたところ、「夷使の言葉には忠義がよく見て取れるが、事は重大であり、さらに両広総督に文書を送り、(暹羅へ)移文させ、別に有能な官員を選び、夷使と共に暹羅へ往かせ、朝廷の徳義を宣諭せよ。回文を得てから実行せよ。その他は共に擬に依れ。」とあった。兵部は聖旨に依って宣諭した。⁽²¹⁾

一方、明人王圻の『續文獻通考』にも同様の記述が見られるが、『再造藩邦志』とは異なり、上奏が前線の指揮を任された経略侍郎宋應昌を通して九月に行われたと伝えている。⁽²²⁾『續文獻通考』は万曆三十一年(一六〇三年)に完成しており、『再造藩邦志』は仁祖二十七年(二六四九年)成立である。通常ならば、成立時期が早い『續文獻通考』の方が史料の確度が高いと判断されよう。しかし、宋應昌の北京出発時期を考えると、上奏が宋應昌經由であ

るという説には疑わしい点がある。

『赴京日録』によると、宋應昌が出発したのは九月二十六日である。『栢谷集』所収「在北京状啓」には、二十日に午門に来ていた宋應昌と朝鮮の通事とが話した内容が伝えられているが、暹羅については何も触れられていない。九月二十二日からの宋應昌の上奏、咨文等を収録している『経略復國要編』にも、そのような上奏は見あたらない。二十日から二十二日までの間に宋應昌が上奏した可能性もあるが、第二節で詳述するように、この上奏自体は九月二十八日以降になされたと考えられる。十二月八日に朝鮮国王に謁見した鄭崐壽は、暹羅が出兵を請願し、明はその上奏を受け入れ来春發兵予定であることを報告しているため、鄭崐壽が北京を出発した十月二十九日以前に上奏され、明旨が下ったと推察される。

以上より、暹羅使節の出兵請願の上奏は宋應昌を経由していない可能性が高い。この上奏に関しては、『再造藩邦志』の方が確度の高い史料であると結論して差支えないであろう。⁽²⁴⁾

第二節 暹羅の出兵請願と兵部尚書石星

従来の研究において朝鮮などの政治的に深い関係を持つ冊封国とは異なり、貿易のために冊封国となったと見做されてきた暹羅だが、なぜ出兵を請願することになったのであろうか。そもそも一五九二年には、アユタヤは依然ビルマとの戦争を続けており、この時期にナレースエンがわざわざ遠く離れた朝鮮への援軍を申し出るといえるのは、不可解である。

この疑問を明らかにする興味深い出来事を、鄭崐壽は『赴京日録』に書き残している。九月二十八日に石星によって自宅に招かれ初めて直接交渉の場を得た鄭崐壽は、涙ながらに懇願し、なんとか明から更なる援兵を引き出そうとするのであるが、その場には朝鮮使節のみならず暹羅国伴送使も招かれていた。

(石星との会談が)終わると、跪いて叩頭再拝し、拱手してから退出した。暹羅国伴送通事の李姓の人がひそかに通事に声をかけて言うことには、「尚書が再びわたしたちを招いたのは、きつと暹羅に日本を挟み撃ちさせようという考えだからである。本国の弓は人に入らず、剣は切り裂けず、鉄丸は貫かないのにどうするというのだ。此の武器をもって倭を攻められるだろうか。広東から琉球を過ぎてわたしの国に到る。わたしの国は右、日本は左にある。その間は長い灘となっていて、舟で行くことはできず、必ず広東に至ってから日本にたどり着く事ができる。今日貴邦に賊を為す者は、皆福建の人ばかりである。倭子がどうして路を知り、入寇できるだろうか。」云々⁽²⁵⁾。

伴送使とは、その名の通り使節に付き添う官である。⁽²⁶⁾暹羅の場合は広東から同道することになる。暹羅国伴送通事が暹羅を「俺國」と述べていることから、この通事は暹羅出身者と考えられる。「今日貴邦に賊を為す者は、皆福建の人ばかりである。」と言うのは、当時秀吉が福建人であるという噂が流れていたためであろう。⁽²⁷⁾この伴送通事の発言からは、九月二十八日時点で暹羅使節が既に出兵請願の上奏を行っていたと考えることは難しい。それどころか、ナレースエンが出兵の意向を持っていたようにには考えられない。

この史料以外にもナレースエンによる出兵提案説を疑問視する根拠として、使節の派遣時期が挙げられる。『萬

曆起居注』によると、明側の要請を受けタイ語教授のために暹羅国王から派遣された握悶辣一行は、万曆五年(一五七七年)五月に本国を発ち、万曆六年九月に北京に到着している。⁽²⁸⁾アユタヤから北京まで、約一年三ヵ月かかったことになる。また、万曆三十九年(一六一一年)燕行の際に琉球使節、暹羅使節と筆談した朝鮮人李晔⁽²⁹⁾の燕行録「琉球使臣贈答録」によると、暹羅使節は万曆三十八年三月に暹羅を離れ、三十九年十月に北京に到着しており、約一年七ヶ月かかっている。つまり、通常暹羅使節は、北京到着の一年以上前にアユタヤを出発していたと考えられるのである。当時アユタヤから明に朝貢する際は、五、六月の南風を用い、帰還には十一、十二月の北風を用いていた⁽³⁰⁾ため、おそらく万曆二十年(一五九二年)の使節も、十九年の五、六月にアユタヤを出発し、その年のうちに広東に到着、翌年九月ごろに北京に到ったと推察される。⁽³¹⁾暹羅使節は日本軍の出兵以前に明に到着しており、ナレースエンが援軍派遣を提案することは不可能である。

そもそも『再造藩邦志』では、「ちように暹羅国の使臣が来貢しており、この議論を知り、倭国の兵を減ぼすことを手伝いたいと望んだ。」と記され、蕭彦の上奏でも、「国王」ではなく「貢使」が申し出てきたと述べられており、国王であるナレースエンが援軍を提案した事を示す史料の根拠はない。⁽³²⁾

以上から明らかなように、ナレースエンが自発的に出兵請願を行ったという説は誤りである。『赴京日録』から窺うに、この出来事には兵部尚書石星が深く関わっていると考えられる。石星は、暹羅使節が北京に到着する前である八月に、暹羅からの借兵を提案した程鵬起という男に参将の職銜を与え、暹羅に派遣していた。⁽³³⁾このような手を打っていた石星なら、北京に來た暹羅の使臣に直接出兵を打診しても不自然ではない。

石星は鄭崐壽との会談の中で、福建、広東、浙江等の兵に琉球、暹羅と共に来年四月に日本を直接攻撃させる、と述べていた。⁽³⁴⁾ 伴送通事の言を踏まえて考えると、石星は未だ暹羅使節との合意がなされないうちに、朝鮮使節に暹羅の出兵について発言しようである。暹羅の使臣が、何故石星の思惑に乗り出兵を申し出たのかは分からない。使臣の与り知らぬ所で上奏がなされた可能性も否定はできない。事情は定かでは無いが、いずれにしろ暹羅国正使握叭喇の名で暹羅による出兵請願は出され、明旨が下されたのである。

その後、蕭彦によって反対の上奏が出され、判断が下ったのが万曆二十一年（一五九三年）正月であった。蕭彦の反対を受けてもなお、兵部は暹羅国王に宣諭し、舟師を準備させる選択肢を残していた。『明史』巻二二七、蕭彦伝では、石星が蕭彦に反対されたにも関わらずこの案に執着したと描かれている。暹羅の出兵請願が石星の仕組んだものであるならば、この態度は非常に納得がいくものである。

結果的には、暹羅の軍隊が出兵することはなかった。戦局が日本との停戦という流れに変わっていったことも理由の一つであろう。しかし、以上のような暹羅の出兵請願の経緯を見るに、たとえ使臣自身が会同館提督主事に申し出たのだとしても、あくまでも暹羅使臣の独断であり、ナレーズエンは出兵する意志がなかったと考えるべきであろう。

第二章 万曆知識人と借暹羅兵論

第一章で、暹羅使節の出兵請願が石星によって仕組まれたことを明らかにした。暹羅は、洪武四年（一三七一）

に初めて朝貢して以来、崇禎十六年（一六四三年）に到るまで二百七十年近く朝貢を続けていたが、三年一貢という規定には従わず、明初には頻繁に朝貢し、弘治から万曆にかけては十二十年の間隔で断続的に朝貢していた。朝貢頻度だけを見ると関係が深いとは思えない暹羅に対し、兵部尚書である石星が、なぜ兵を借りようとしたのであろうか。この点を考察するために、まず本章では同時代人が暹羅から兵を借りることに対し、どのように考えていたのかを確認したい。

第一節 蕭彦の意見

まず、総督両広都御史蕭彦の意見に着目したい。蕭彦は貴州や雲南の巡撫を歴任し、苗族の叛乱や、ビルマに侵略され明に従わなくなっていた孟養、车里宣慰司の慰撫などに対処しており、中国南部の辺防に明るかった人物である。万曆朝鮮役に際しては、鄧鍾に命じて鄧若曾の『籌海圖編』を重編させ、日本軍に備えていた。蕭彦の上奏は、彼の文集『制府疏章』に「夷心難測借兵宜慎疏」として収められている。『明實錄』では「總督兩廣都御史」とされているが、万曆二十年十月辛丑條で戸部侍郎に任命されており、また疏中で十一月二日に邸報を読んだと記されているため、後任が広東へ着任するまでの交代期間に両広総督として上奏したものであったと考えられる。その要点をまとめると、以下になる。

① 暹羅は代々臣従しているが、朝鮮ほど忠実ではなく、親しくない。そのような国から兵を借りるのは兵法が忌むところで、中国の役には立たない。

②使節の言には確実性が乏しく、国王の考えは不明であり、功名を求める中国側の通事が仕組んだ請願である可能性もある。暹羅の兵が派遣されなかった場合、中国の威信を傷つける。今は天下全盛の時期であり、中国の兵だけで日本に対処できるので、わざわざ暹羅から兵を借りる必要はない。

③暹羅は日本に劣らないほど強く狡猾であり、海戦ならば日本は暹羅に敵わないが、陸戦ならば暹羅は日本に敵わない。出兵し不利になった場合我々を頼って来ようが、その際に問題が起き、日本に勝つ前に暹羅が敵になってしまう危険性がある。

④暹羅が日本を攻撃する場合舟を用い、必ず広東、福建などを経由する。特に広東は要所であり、必ず寄港し、檣文を盾に様々な要求をして人々を蹂躪するであろう。また、海岸部には夷邦に出入りする姦人が多数おり、暹羅兵が来れば、その中に紛れ込んで中国にやってくる可能性がある。

⑤暹羅が誠心から出兵を申し出ていたとしても、それほど兵数を期待できない。

⑥使節は長い期間北京に滞在し、朝鮮の切迫した状態をよく知っている。その上で暹羅に兵を借りるのは、中国の弱みを晒すことになる。

⑦「夷を以て夷を攻める」のは、平時ならば中国側が統率できるため良い。しかし、事態が急であり、暹羅の本心が分からない状態では、「夷を以て夷を攻める」という形にならない。

暹羅に対する不信感がありありと現れた上奏文である。暹羅の出兵請願を受け入れて兵を借りることによる広東の治安の悪化のみならず、将来的な中国の危機や、出兵請願が明側の人間によって仕組まれたものである可能性に

まで言及されており、両広総督として非常に現実的で、的確な判断である。長い間辺境で「夷狄」に対処してきた蕭彦にとって、地方の現状や地理的事情を考慮しない兵部の決定は、到底認められるものではなかった。

第二節 于慎行の意見

蕭彦以外に暹羅からの借兵に対し意見を残した同時代人に、于慎行がいる。万曆十九年（一五九一年）九月に致仕し、故郷の山東東阿縣に戻るまで礼部尚書であった人物である。著書『穀山筆塵』によると、当時朝廷では朝鮮に援軍を出したものの、勝てないことを危惧し、後に叛乱を起こすことになる播州の楊應龍に出兵させる等の案が出ていた。程鵬起の案は奇策として受け入れられたが、これを聞いて驚き笑わない識者はいなかったという。暹羅からの借兵案を否定する理由として、于慎行は楊應龍を用いることと併せて以下のように述べる。

暹羅などに至っては小国であり、海の南隅にあり、どうして日本が之を土塊ほどにも見做すだろうか。それなのに（暹羅に）日本の都を攻撃させようとしても、小虫を鼎に入れるようなものである。それだけの理由ではなく、たとえ播酋（楊應龍）が恭順であり、暹羅が盛強であったとしても、どうしたってできはしない。なぜか。（楊應龍は）蜀から遼に至り、（暹羅は）両海を経るのだから、（戦地の）環境に慣れておらず、力を發揮できない。暹羅は小国であり、占城の南、琉球の西に位置し、三十数年朝貢しておらず、使者が虎符を佩いて行ったとしても、どうして相手にされるだろうか。ましてやその兵を発するのはなおさらである。これらの見解は、酔うが如く狂っているかの如くであり、国の計略がこのようなであれば、どうして敗れないことがあるか。⁽³⁵⁾

暹羅が小国であり三十数年朝貢していないことから、借兵案を否定している。しかし、暹羅は万暦三年（一五七五年）に朝貢しており、「三十数年朝貢していない」というのは誤りである。于慎行が礼部尚書を務めていながら暹羅についてよく知らないことは、暹羅の位置を誤認していることから分かる。「暹羅は小国であり、占城の南、琉球の西に位置」と述べるが、占城は現在のベトナム中部に当たり、暹羅は占城の西に位置する。于慎行は、暹羅が海路で広東に至るため「僻在海南」の国であると思い、雲南に近いことを知らなかったのである。⁽³⁶⁾

以上見てきたように、当時の明人にとって、暹羅は冊封国といえども信用に足る国ではなく、兵を借りることは受け入れ難い案であった。朝鮮でも鄭崐壽の報告に対し、実際に暹羅が日本を倒せるのかどうか疑問視された。⁽³⁷⁾ それでは、なぜ石星はわざわざ暹羅から兵を借りようとしたのであろうか。次章では石星の行動の背景にある、明と暹羅との関係の変遷を検証していく。

第三章 明と暹羅

第一節 万暦以前

前述のように、一般に明と暹羅の関係は貿易関係と捉えられ、冊封国でありながら明朝の政治的影響力は低いと考えられてきた。その証拠として、先行研究では暹羅のマラッカ圧迫と冊封使林霄の憤死事件が挙げられている。⁽³⁸⁾

マラッカ圧迫は永楽から宣徳年間の『明實錄』に窺える。永楽五年（一四〇七年）、暹羅に侵略され印誥を奪われた、とのマラッカからの訴えを聞いた明朝は暹羅に勅諭を送り、マラッカとの和睦を命じた。暹羅は翌年遣使朝貢

した際謝罪するが、マラッカへの圧迫を和らげることはなかった。明朝は永楽十七年（一四一九年）、宣徳六年（一四三一年）にも勅諭を出したが、効果はなかった。⁽³⁹⁾

冊封使林霄の憤死事件については『嘉靖太平縣志』に詳細が伝えられている。

憲宗皇帝は衆より（林霄を）お選びになり、（林霄は）一品服を賜わり、暹羅に使いし、その国王を冊封する命を奉った。…やがてその国に至るが、国王との相見の礼を議論し（明側の求めるものに）合わなかったため、結果、詔命を宣諭するのを拒んだ。公（林霄）は幽閉され、冷遇された。公は屈せず、かくして憤りのあまり病を得、死んだ。その後副使の行人姚隆は結局節を折って国王と見え、宴で厚くもてなされ、賄賂を得て帰った。孝宗皇帝はこのことを聞いて姚を罷免し、詔して公の一子非を国子生とした。⁽⁴⁰⁾

林霄が派遣されたのは成化十八年（一四八二年）である。当時のアユタヤは、トライローカナート王のもと官僚職階制度を再編成し、中央集権化を果たした時期であった。⁽⁴¹⁾ アユタヤに強力な君主が現れた時期故に、このような事件が起きたのであろう。その他にも、天順元年（一四五七年）には暹羅使節が山東の飢民の子女を買って奴隷にし、その上私塩を購入したことが問題となっていた。⁽⁴²⁾ 以上から分かるように、暹羅は決して従順な冊封国ではなかったのである。

それでは明にとつての暹羅はどのような存在であったのであろうか。このことを端的に示すのが、訳館の設立時期である。暹羅は漢文の表ではなく、タイ語とペルシャ語で書かれた金葉表文を国書として用いていたため、四夷館で訳していたが、四夷館にタイ語を専門に扱う暹羅館が設けられることが決まったのは、万暦六年（一五七八年）

になつてのことであつた。⁽⁴⁴⁾ 四夷館にタイ語を訳せる者がいないという問題は弘治十年（二四九七年）、正徳十年（一五五五年）に上奏がなされ、広東のタイ語に通曉する者の派遣や、暹羅使節の中から人を選んで四夷館に留め置かせるなどの対応を採り、解決を図つた。⁽⁴⁵⁾ 訳字官が居ない間は、回回館に回してペルシャ語を訳させ、審訳の際に通事にタイ語で書かれている内容を説明させていた。⁽⁴⁶⁾

この時期の暹羅の外交文書に対する明の態度を物語る出来事が、『明實録』に記されている。成化二十三年（一四八七年）、前回請封した際の際の金葉表文と、勘合、咨文の間に異同が出てきたため国王が国人の書写を疑つてゐるとして、暹羅使節が明に検査を願つた。この請願に対し明は、タイ語を理解することが難しいので自国で検査を行い、今後はペルシャ語のみ使うように命じた。⁽⁴⁷⁾ 明は冊封国である暹羅からの外交文書に、何が書かれているかを正確に理解していなくとも構わなかつたのである。

『華夷譯語』に収録されている「暹羅館來文」を分析したシヨンラオーンは、タイ語が意図的に「朝貢用語」に訳されていることが確認できることを指摘している。⁽⁴⁸⁾ アユタヤにとつては金葉表文が正式な文書であり、必ずしもへり下つた表現を使つてはいなかつた。おそらく明側は、それを認識していながら放置していたのである。訳館という訳字官を維持するための組織の設立を求める上奏がなされたのは、万暦六年（一五七八年）になつてのことであつた。⁽⁴⁹⁾ 明は少なくとも万暦になるまでは、暹羅との関係にそれほど重きを置いていなかったのである。

第二節 万暦元年から日本の朝鮮出兵前夜

以上のような明と暹羅の関係は、万暦年間に一変する。万暦元年（一五七三年）に十四年ぶりに朝貢した暹羅だが、一五六九年にビルマに征服され、その一地方政權となつていた。この際、暹羅使節が東牛国（タウンゲー）によつて印信勘合が破壊されたため、暹羅使節が再発行を求めている、という両広総督からの上奏がなされた。⁽⁵⁰⁾ 来貢した朝貢国の使節は明から賜与された印を用いた国書、前回に与えられた勅書、勘合、布政使司の回文を持参しなければならなかつた。⁽⁵¹⁾ この使節は、少なくとも国書と勘合を欠いていることになる。使節が再発行を願つたにもかかわらず許されなかつたのか、三年（一五七五年）に朝貢した際も使節は再度印信勘合の発行を願う。⁽⁵²⁾ 万暦元年、三年の使節が勘合を欠き国王印が押印されていない表文しか持参していなかつたにも関わらず、明は朝貢を許したようである。

この三年の朝貢時に金葉表文を訳せる者がいなかったため、明は暹羅からタイ語と中国語に精通する人物を選び、北京でタイ語を教習させることを決定した。十分な翻訳能力のある訳字官が必要になる程、万暦三年頃から暹羅の重要度が増してきたことを示している。次いで万暦六年（一五七八年）九月に使臣握悶辣、握悶鐵、握文貼が、訳官養成のための教授として通事握文源と共に派遣されて来た。⁽⁵³⁾ 三年の時点で明は印信勘合の再発行を認めていたが、暹羅国王印の資料が明側に残つておらず、広東から暹羅に人を派遣して調査しているところであつたため、未だ再発行されていなかった。握悶辣らが再発行を請い、⁽⁵⁴⁾ 十月に国王印が鑄造されたが、渡されたのは万暦十年（一五八二年）にタイ語教授の任を終えた握悶辣らが帰国する際のことであつた。⁽⁵⁵⁾

その間万暦七年（一五七九年）の暹羅館の開館以外にも、明と暹羅との関係に変化が現れてくる。明は、万暦四

年（一五七六年）に入貢した琉球使臣に対し、通常の下賜の他に五日毎に追加の食糧を供給することを決定した際、朝鮮、暹羅の使臣にも同様に給し、他の使臣より優遇することとした。⁽⁵⁸⁾驚くべき事に、単なる冊封国の一つでしかなかった暹羅使節への待遇を、「衣冠禮義之國」として礼遇し、他国の使節に特別に褒賞する際の基準としている朝鮮、琉球に対する待遇と同じにしているのである。

この変化の裏には、明が暹羅を以前より重要視せざるを得ない事情が見出させる。その事情とは、異民族の度重なる明に対する反抗である。特に明にとって何よりも脅威であったのが、「北虜」モンゴルであった。嘉靖年間からトゥメド部のアルタンハーンが連年のように明領内に侵入し、二度も北京を包囲した。隆慶五年（一五七一年）に和議を結んだものの、あくまでアルタンハーンの勢力とのみであり、チャハル部のトゥメンジャサクトハーンによる侵略は、万暦に入っても頻発していた。また、アルタンハーンとの「封貢」関係によって長期的安定が得られるかどうかは、モンゴルの出方による部分が大きかった。中華としての威信は大きく揺らいでいたと言えよう。また同時期にはバインナウン王により再統一され勢力を拡大するビルマのタウングー朝が、明から与えられた官爵ではなく独自の称号を公然と名乗り、アユタヤや多数の土司を併合したのみならず、雲南地方を絶えず脅かしていた。⁽⁶⁰⁾

そのような中、万暦元年（一五七三年）に訪れた暹羅使節は、下賜されていた国王印の再発行を求めてきた。明側から見れば、中華の徳を慕う行為に映ったことであろう。しかし元年には明は国王印を発行しなかった。すると、三年にも再度国王印を求めに朝貢して来たのである。この行為が明の中華意識を満たしたことは想像に難くない。

長年に渡るアルタンの脅威が表面上治まった中、「四夷賓服」という平和な世の中を演出する上で、近年明との間での何のトラブルも起こしていない暹羅は恰好の存在であったはずだ。

「向慕」には「恩恵」を与えねばならない。それ故、万暦三年（一五七五年）にはタイ語の訳字官を養成しようとし、万暦四年（一五七六年）には暹羅に対する待遇を朝鮮、琉球並にしたと考えられる。万暦六年（一五七八年）には暹羅国王印を鑄造し、翌年には暹羅館を開館、暹羅通事の養成が本格化する。しかし明の厚遇とは裏腹に、国王印を得た後に暹羅使節が朝貢したのは、それから十年後の万暦二十年（一五九二年）であった。この間、アユタヤ側の状況はどうなっていたのであろうか。

一五六九年にアユタヤがビルマに併合されたことは既に述べたが、一五七一年に人質となっていた王子ナレーズエンがビルマから帰国した。万暦元年（一五七三年）の朝貢を行ったのは、その後の事である。元年に国王印を得られなかったアユタヤはさらに二度、暹羅国王印を請求し、万暦十年（一五八二年）によりやく獲得する。アユタヤがビルマからの独立を宣言するのは、その二年後の一五八四年のことであった。⁽⁶¹⁾

度重なる国王印の請求はビルマからの独立の意志を示す行動であり、交易活動によって国力の充実を目指すアユタヤの姿勢を示している、と石井米雄は指摘している。⁽⁶²⁾ただ留意しなければならないのは、明は弘治年間から朝貢使節の附帯貨物にも関税をかけ、正徳四年（一五〇九年）には民間船の広州入港を容認し、隆慶元年（一五六七年）には中国商人の海禁を緩和していた。この時期の朝貢貿易がアユタヤにとってどれほど魅力的であったかは、十分には明らかでない。⁽⁶³⁾国王印がなくとも朝貢が許されていたことを考えると、アユタヤの朝貢の目的は、交易もさる

ことながら、明から国王印を再発行してもらうことに比重があったと考えられる。

だが、アユタヤにとって国王印を得ることにどのような利点があるのであろうか。蕃王が中国皇帝から冊封される政治的意図は一般的に、①国内での権威を高める、②他国との紛争の調停を共通の「上国」である中国に期待する、と考えられているが、アユタヤの場合、②は当てはまらない。ビルマは確かに明から緬甸土司に任じられていたが、万暦元年（一五七三年）には独自の称号を名乗り、公然と明を拒んでいた。⁽⁶⁵⁾そのようなビルマに対し中国の権威を持ち出しても、大きな効果を期待できたか疑問である。そもそもアユタヤは日本に侵略された朝鮮、琉球や、国内争いで追い詰められた安南の莫氏が明に援助を求めたのとは異なり、明に軍事的援助や調停を求めたことはなかった。アユタヤはビルマとの戦争に、「上国」としての明の介入を求めているのである。そうなると考えられるのは①だが、アユタヤ国内で中国の権威がどれほど意味をなしたかは明らかでない。明から土司に任じられていた国々と関わりがあるのかも知れないが、この点についてはシャム史からの更なる検討が必要であらう。⁽⁶⁶⁾

万暦元年（一五七三年）、三年（一五七五年）と朝貢し、俄に「入貢恭順」の国となった暹羅だが、この間単に朝貢するだけではなく、パタニやアユタヤまでも活動領域としていた海寇林道乾討伐への軍事協力が見られる。万暦三年、両広総督殷正茂は林道乾討伐のために暹羅と安南に檄諭し、協力させた。八年（一五八〇年）になっても林道乾は依然中国沿岸からシャム湾まで活動しており、両広総督劉堯誨は、林道乾との戦闘を報告するために派遣されてきた通事握坤哪喇に暹羅軍と広東軍で挟撃するように命じたが、結局は破ることができなかった。⁽⁶⁸⁾

万暦八年の林道乾討伐以降も、明が暹羅の軍事力を利用しようとする動きが確認できる。万暦元年（一五七三年）、

隴川宣撫司に任じられていたムンワン王国国王を華人の血を引くハイ・ロン（岳鳳）が殺害し、王位を篡奪するという事件が起こった。ハイ・ロンはビルマに忠誠を誓い、後にビルマの軍勢を動員してムンナー王国（千崖）、センウィー王国（木邦）など各地の土司に任じられていたタイ族の王国や雲南地方に攻め入った。⁽⁶⁹⁾万暦十一年（一五八三年）に永昌をビルマ軍に侵攻された際は、明は後に朝鮮にも出兵する鄧子龍、劉綎といった武將を起用して大勝し、ビルマ軍をアヴァまで追撃、降伏させる。万暦十二年（一五八四年）にはハイ・ロンを処刑するが、十九年（一五九一年）に再度ビルマ軍に永昌を侵攻される。この際雲南巡撫の吳定が、暹羅に遣使宣諭して緬甸を挟み撃ちにすることを上奏していた。⁽⁷¹⁾また、二十二年（一五九四年）には雲南巡撫陳用賓が騰衝に八関を設け緬甸に対する防禦を固め、暹羅に遣使し緬甸を挟み撃ちにすることを約束させており、三十二年（一六〇四年）にも暹羅と協力して緬甸を討つべきことを上奏している。⁽⁷²⁾明は次第に暹羅を軍事協力させられる国と見なすようになっていったのである。

以上のような対海寇、対緬甸軍事行動における暹羅との協力関係は、明朝中枢の一部に冊封国暹羅を特別視させたようである。石星による暹羅への借兵工作以前に、明は万暦十九年（一五九一年）に日本の出兵計画情報を伝えた朝鮮使節に対する勅諭で、暹羅、琉球と兵を合わせて日本を攻撃するよう命じていた。⁽⁷⁴⁾同様の記述は、二十年（一五九二年）八月到北京を發った行人薛藩が朝鮮にもたらしした勅諭や宋應昌の檄文にも見られる。明の威信を示すための表現ではあるが、弱体化している明にとって暹羅はもはや単なる一冊封国ではなく、軍事協力を引き出しうる重要な冊封国として、明朝における地位を急速に高めていたことは明らかである。そしてそれ故、兵部尚書であ

る石星は真剣に暹羅から兵を借りる道を模索していたのである。

おわりに

本稿で検証したように、明から暹羅に厚遇が与えられ度々軍事協力が見られるようになったといえども、万暦二十年（一五九二年）頃まで暹羅は冊封国であつても、必ずしも明人にとって信頼できる国ではなかった。しかし藩屏である朝鮮、そして堂々たる「中華」が日本に脅かされたとき、明朝が利用しようとしたのは琉球でも安南でもなく、暹羅であつた。⁽⁷⁶⁾

従来ナレーズエンの業績と考えられていた日本への出兵提案は、石星によって仕組まれたものであつた。結局、暹羅は朝鮮に援軍を送ることはなかったが、この事件を機に暹羅についての言説に変化が見られるようになる。

『明實録』万暦四十年（一六二二年）五月壬寅條の礼部主事高繼元の上奏では、暹羅を朝鮮、琉球と並べて「冠帯之國」とし、『東西洋考』の著者張燮は、暹羅との交易について、「暹羅人は華人を大変誠実に礼遇し、他夷に大いに勝る、真の慕義の国である。」⁽⁷⁷⁾と述べ、占城と比較して、「暹羅は国内が泰平であり、子弟を国子監に入学させることを請い、属国が大いに乱れると、戦いを助け、倭を捕らえることを請う。これが二国の優劣である。」⁽⁷⁸⁾と、出兵を請願したことを理由の一つとして高い評価を与える。このような高評価は、管見の限り万暦二十年（一五九二年）以前には見出せない。暹羅の日本への出兵請願は、朝貢しているとはいえ信頼できない冊封国から、「冠帯之國」、「真慕義之國」と中国人の暹羅観を大きく変える程の出来事であつた。そして暹羅の出兵請願は歴史的事実とされ、

アヘン戦争に敗れた後に著された魏源の『海國圖志』の中で、マラッカ、シンガポールをイギリスから取り返すための策として思い出される事となる。⁽⁷⁹⁾

アユタヤは、二百七十年近く朝貢使節を送り続けていた。確かにアユタヤにとって朝貢は、もともと貿易のためであつたかもしれない。しかし、ビルマによつて征服されて以降、万暦初期の使節によつて示されるように、そこには貿易という経済的要因だけでなく、政治的要因も働いていた。明とアユタヤの関係は、少なくとも万暦年間においては、単なる貿易関係だけではなく、宗主国—冊封国という形を取りながら、互いの都合の良いように政治的に利用するものであつた。明は海寇、緬甸、日本などによる脅威に対し暹羅の軍事力を利用し、アユタヤはビルマに占領されるという王国の危機において、明から国王印を再発行してもらうことで、中国の権威を何らかの形で利用しようとした。

明にとって、国力の衰えや国際環境の変化の中、例えば形式的であつても旧来の明の秩序に従い、冊封国として軍事協力を引き出せる暹羅の存在は重要であり、明における暹羅の位置付けは、急速に変わっていった。時代の変化の中、図式的な理解では捉えきれない国際関係の変容が、ここには見て取れるのである。

註

(1) 西嶋定生「冊封体制と東アジア世界」(『西嶋定生東アジア論集』第三卷、岩波書店、二〇〇二年)、J. K. Fairbank,

ed., *The Chinese World Order: Traditional China's Foreign Relations*, Harvard University Press, Cambridge, 1968. 近年様々な研究を通じ、両者の国際秩序論の見直しがされている。

明に関しては、夫馬進「一六〇九年、日本の琉球併合以降における中国・朝鮮の対琉球外交―東アジア四国における冊封、通信そして杜絶」(『朝鮮史研究会論文集』四六、二〇〇八年)等の中国と冊封国間の実証的な外交研究や、明朝の朝貢体制を原理面から明らかにしようとした檀上寛「明朝の対外政策と東アジアの国際秩序―朝貢体制の構造的理解に向けて―」(『史林』九二―四、二〇〇九年)等がある。

(2) 明に特有の「海禁」朝貢システムについては、檀上寛「明代「海禁」の実像―海禁と朝貢システムの創設とその展開―(歴史学研究会編『港町と海域世界』、青木書店、二〇〇五年)参照。

(3) アユタヤは、アヨードヤと呼ばれた「前期アユタヤ」と、ビルマによる征服の後ナレーヌエンによって独立し、国号をアユタヤとした「後期アユタヤ」に分けられる。今回は明代を通しての「暹羅」との交渉を考えるため、便宜上「暹羅」＝「アユタヤ」とする。

(4) 松浦章「萬曆四十五年暹羅国遣明使―明代朝貢形態の様相―」(夫馬進編『増訂使琉球録解題及び研究』、榕樹書林、一九九九年)及び石井米雄「港市国家」としてのアユタヤ」(『タイ近世史研究序説』、岩波書店、一九九九年)。

清と暹羅に関しては、サラシン・ウィラボンの研究がある。Sasani Viraphol, *Tribute and Profit: Sino-Siamese Trade 1652-1853*, Harvard University Press, London, 1977.

(5) (万曆)二十年、日本破朝鮮、暹羅請遣師直搦日本、牽其後。中樞石星議從之、兩廣督臣蕭彥持不可、乃已。

(6) 總督兩廣都御史蕭彥奏、「暹羅居極西、去日本萬餘里。近有貢使、請於兵部、願效勤王。兵部覆令、發兵直搦日本。又念海道曠遠、夷心叵測、要行停請。」兵部議、「關白以賊廝篡奪、淫虐奸狡、憑陵諸國。今復占據朝鮮、潛圖內犯、致墮王師。乃暹羅貢使憤茲不道、既效勤王之忠、亦篤恤鄰之義。臣等特為請遣、一以風厲遠邦、一以牽制倭衆。蓋兵家固有多方以誤之者。初非以堂堂中國、特茲島夷之力為也。明旨、「既嘉其忠義、又重其時機、必待督臣酌議、取彼回文、方可頒勅。」深識遠見、隱然具在。今督臣坐鎮炎荒、海邦機宜、悉如指掌。合令查照題議事理。將本部差去號召官員悉聽酌量行止。如已達彼國、即便責差忠勇通官、傳檄宣諭暹羅國王、遵照明旨、整飭舟師。回文奏報、別聽勅書至日、遵行。」從之。

(7) 石井米雄「後期アユタヤ」(岩波講座東南アジア史第3巻 東南アジア近世の成立、岩波書店、二〇〇一年)一八一頁参照。

(8) O. W. Wolters "Ayudhya and the rearward part of the world", *Journal of Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland*, 3-4, London, 1968.

(9) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年四月壬寅條。和暦では四月十二日である。

(10) 『修正宣祖實錄』二十五年五月壬戌條、『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年五月丙寅條。

(11) 『明實錄』万曆二十年五月己巳條。

(12) 米谷均「朝鮮侵略前夜の日本情報」(『日韓歴史共同研究委員会第1期(2002-2005年)報告書第2分科(中近世)』財団法人日韓文化交流基金、二〇〇五年)二〇八頁参照。

(13) 『明實錄』万曆二十年六月庚寅條。

(14) 『明實錄』万曆二十年六月乙卯條、同年七月癸未條。

(15) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年六月庚戌條。

(16) 詳細は北島万次「豊臣秀吉の朝鮮侵略」(吉川弘文館、一九九五年)一一五―一二七頁参照。

(17) 『明實錄』万曆二十年八月壬辰條。

(18) 嘉興出身の市井無頼の徒で、石星の妾父と交友があったのを利用し登用された。彼と小西行長間で和平交渉が行われる。詳細は前掲註(16) 北島著書参照。

(19) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年八月甲辰條、乙巳條、

丁未條、辛亥條。

(20) 『栢谷集』卷二、在北京狀啓(民族文化推進會編『韓國文藝叢刊』四八、民族文化推進會、ソウル、一九九〇年)。

(21) 卷二「時天朝方議出援。適有暹羅國使臣來貢、聞此議、欲助滅倭國兵。兵部乃因提督主事揭報上本曰、「暹羅國王使握叭喇、願督兵蕩勦倭巢等情。未知何處之。」奉聖旨、「據夷使所稱具見忠義、而事關重大。還行與兩廣總督、着移文、另選一能事官員、併夷使同往彼國、宣諭朝廷德意。取有回文、方可以舉事。其餘俱依擬。」兵部依聖旨宣諭。」

(22) 卷三三六、暹羅「萬曆二十年九月、經略侍郎宋應昌奏『暹羅國正使握叭喇等願督兵蕩勦倭巢。』奉旨、「據夷使所稱具見忠義、事關重大。還行與兩廣總督、着移文、另選一能事官員、與原差官併夷、同往彼國、宣諭朝廷德意。取有回文、方可頒勅舉事、其餘俱依擬。」第二章で触れる蕭彥の上奏は、邸報から始ど同文の聖旨の文章を引用している。王圻も邸報を基にして記事を書いたのであろう。

(23) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年十二月甲午條。

(24) 前掲註(22)で述べたように、王圻は邸報を利用したと推察されるが、上奏の經由者に関しては筆者は考証から申呉の記事の方が信憑性が高いと考える。王圻がなぜ宋應昌からの上奏と記したかは不明だが、二人が同年進士であつ

たことと係わりがあるのかもしれない。

- (25) 語畢、跪叩頭再拜、作揖而出。暹羅伴送通事李姓人の、潜謂通事曰、「尚書再招我的者、必是教暹羅挾攻日本之意也。本國其奈箭不入人、劍不利割、鐵丸不洞何哉。以此兵可以攻倭耶。自廣東過琉球到俺國。俺國在右、日本在左。其間有長沙、不能行舟、必也到廣東、可以抵日本。今日作賊於貴邦者、皆福建之人耳。倭子安知道路而入寇耶。」云云。

- (26) 『萬曆』大明會典』卷一〇八、朝貢通例、俞汝楫撰『禮部志稿』卷三六、凡番使往回參照。

- (27) 詳細は、鄭潔西「秀吉の中国人説について」(『或問』一四、二〇〇八年) 参照。

- (28) 『萬曆起居注』八年五月三日辛未條、十年五月二四日辛巳條參照。王宗戴『四夷館考』暹羅館では、万曆五年八月にアユタヤを發ったとしている。

- (29) 李暉光について詳細は、清水太郎「ベトナム使節と朝鮮使節の中國での邂逅(3)——一五九七年の事例を中心に——」(『北東アジア文化研究』一六、二〇〇二年) 参照。燕行録は前掲註(20)『韓國文集叢刊』六六に收録。

- (30) 『四夷館考』暹羅館。

- (31) 万曆四十五年使節について詳しく伝える広東巡按都御

琉球之西、三十餘年不通朝貢、使者佩虎符而往、將安問津。況能發其兵乎。此等見解、如醉如癡、謀國若斯、不敗何爲。」(36) 『萬曆野獲編』の著者沈德符は、于慎行の暹羅の場所の誤認について痛烈に皮肉っている。卷十七、兵部、暹羅參照。

- (37) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年十二月甲午條。

- (38) ピヤダー・シヨンラオン「アユタヤの対明關係——外交文書からみる——」(『広島史学研究会』『史学研究』二三八、二〇〇二年) 参照。

- (39) 詳細は藤原利一郎「明の永樂時代における暹羅との交渉」(『東南アジア史の研究』、法藏館、一九八六年) 參照。

- (40) 卷七「憲皇選於衆、賜二品服、奉命使暹羅、封其國王。……已而至其國、竟以議相見禮不合、遂不肯宣詔命。彼乃除館于其西郊、供張甚薄。公不屈、遂憤憤得病死。已而副使姚行人隆、竟折節見獲厚宴賄以歸。孝皇聞之竟罷姚、詔錄公一子非爲國子生。」

- (41) トライローカナート王の治世は一四四八年から一四八八年であり、この冊封の時期に合わない。陳學林は、王の在位中に王子が冊封されたのではないかとする。詳細は「明成化林霄姚隆出使暹羅之謎」(『文史』四八—三、一九九九年) 參照。

史田生金の「報暹羅國進貢疏」には、十九年には朝貢していないにも係わらず「萬曆十九年入貢」という記述がある。二十年の暹羅使節が十九年のうちに広東に到着していたことの傍証になろう。湯開建、田渝「萬曆四十五年田生金《報暹羅國進貢疏》研究——明代中暹關係史上的一份重要的中文文獻」(『暨南學報 哲學社會科學版』一二九、第四期、二〇〇七年) 一二四頁參照。

- (32) ウォルタースは、『明實錄』に暹羅使節が提案を拒否されたことに憤慨した記述があり、アユタヤ側の発案である証拠とするが、管見の限りそのような記述は存在しない。
- (33) 『萬曆野獲編』卷十七、兵部、程鵬起。程鵬起は福建、広東に行き造船募兵したが、数十万の餉給を着服し、結局出發しなかったため弾劾される。『明史』、『明實錄』には程鵬起の提案や派遣時期についての記事は見あたらない。『明史稿』、『明史』より成立が早い『明史紀事本末』では、程鵬起が提案してきた時期を八月とする。

- (34) 『栢谷集』卷二、先來伏啓、別紙。

- (35) 卷十一、籌邊「……至於暹羅小國、僻在海南、日本視之、何啻培塿。而欲使揭其國都、是以蟻蟻入鼎也。匪獨如此、縱使播酋恭順、暹羅盛強、勢亦不能。何也。由蜀至遼、一經南海、水土不習、強弱亦異。而暹羅小國乃在占城之南、

- (42) 『明實錄』天順元年六月癸巳朔條、及び『明史』卷三三四、暹羅。

- (43) 金を打ち出した薄紙に刻まれた「スパンナバット」という国書のこと。増田えりか「ラーマー一世の対清外交」(『東南アジア——歴史と文化』二四、一九九五年) 參照。

- (44) 『明實錄』万曆六年十一月丁巳條。

- (45) 『明實錄』弘治十年八月乙卯條。嚴從簡『殊域周咨錄』卷八、暹羅。

- (46) 『殊域周咨錄』卷八、暹羅。

- (47) 『明實錄』成化二十三年九月庚戌條。

- (48) 前掲註(38) シヨンラオン論文參照。

- (49) 『萬曆起居注』六年十一月十日丁未條。

- (50) 『明實錄』万曆元年三月甲申條。

- (51) 前掲註(4) 松浦論文參照。

- (52) 『明實錄』万曆三年六月甲午條。

- (53) 『萬曆起居注』八年五月三日辛未條參照。暹羅館の開設については三田村泰助「暹羅館訳語について」(『立命館文学』八一、一九五二年) 參照。前掲註(2) 檀上論文は、十六世紀以降華人が朝貢貿易から姿を消したとするが、万曆三年使節にも参加していた通事握文源は華人である。また、第一章で触れた李暉光の筆談相手も、徐という華人通

事であった。

(54) 張燮『東西洋考』卷二、西洋列國考、暹羅。

(55) 『四夷館考』暹羅館。

(56) 『明實錄』万曆六年十月乙酉條に「鑄給暹羅國王印一顆。」とあるが、十年六月戊申條に「頒給暹羅國王印信、仍賞其使握悶辣等有差。」とあり、六年は印を鑄造したのみであると考えらるべきである。『萬曆起居注』十年五月二十四日辛巳條で握悶辣等の帰国を願う上奏が張居正らにより出され、許可されているため、『明實錄』十年六月戊申條の記述は、握悶辣一行の帰国に際し、国王印が与えられたことを示すと考えられる。

(57) 七年正月四日に開館。『萬曆起居注』八年五月三日辛未條参照。

(58) 『明實錄』万曆四年正月乙卯條。

(59) 『明實錄』嘉靖四十三年十一月戊辰條参照。十五年かけてやって来た安南使節を嘉するため、特別に朝鮮、琉球使臣に対する宴と同じ宴をさせたという。

(60) 『明史』卷三二五、列伝二〇三、雲南土司三、緬甸。

(61) 握悶辣一行が国王印を持ってアユタヤに帰還した後かどうかは不明である。帰国するためには、広東で新たに船を作る必要があった(『萬曆起居注』十年五月二十四日辛巳

條参照)。そのため、帰国まである程度の時間を要したと考えられる。

(62) 前掲註(7) 石井論文一七九頁参照。アユタヤは国王による王室管理貿易を行い、莫大な利益を得ていた。石井は王庫の富裕化が十六世紀後半以降のアユタヤの王権強化の一因になったとしている。前掲註(4) 石井論文参照。

(63) 前掲註(4) 松浦論文は、万曆四十五年使節の進貢品の内容の分析から朝貢の目的が交易であると結論する。筆者も交易的側面を否定しないが、時代的変化や他の冊封・朝貢国との比較研究、アユタヤ側からの実証的研究がさらに必要だと考える。広東における交易秩序の変遷については、岩井茂樹「十六世紀における交易秩序の模索」(同著者編『中国近世社会の秩序形成』、京都大学人文科学研究所、二〇〇四年) 参照。

(64) 岩井茂樹「明代中国の礼制覇権主義と東アジアの秩序」(『東洋文化』八五、二〇〇五年) 一二八頁参照。

(65) 『明史』卷三二五、列伝二〇三、雲南土司三、緬甸。

(66) 『東西洋考』卷二、西洋列國考、暹羅は、国王印の再発行を願った際の表文に「暹羅は数十国を率いているが、天朝の国王印でなければ兵を動かすことが出来ない。」と記していたと伝える。ラタナコーシン朝では清から与えら

れた駝紐鍍金銀印を「ラクダの印章 *the logo*」と呼び、清

への国書のみならず、ベトナムへの国書にも用いていた。

前掲註(43) 増田論文四四頁、及び小泉順子「ラタナコーシン朝一世王朝シヤムの対外関係」広域地域像の検討にむけた予備的考察」(『東洋文化研究所紀要』一五四、二〇〇八年) 一三三頁参照。アユタヤ時代にも、他国への国書に利用するため必要であった可能性が考えられる。また、増田えりか「トンブリー朝の成立」(『岩波講座東南アジア史4 東南アジア近世国家群の展開』、岩波書店、二〇〇一年) によると、ビルマによってアユタヤが壊滅した後、新たにシヤムの統一を行ったターク・シンが、統一の過程で清からの冊封を求めていることから、一六世紀においても中国からの認証がシヤム王権にとって政治的に重要であった可能性も考えられる。

(67) 嘉靖末から万曆にかけて活動した海寇。明朝に追われた後はバタニを本拠にし、王の娘を娶ったといわれる。詳細は陳學林「張居正《文集》之閩廣海寇史料分析」(同著者『明代人物與史料』、中文大學出版社、二〇〇一年) 三四四―三五四頁参照。

(68) 『萬曆武功錄』卷三、林道乾諸良寶林鳳列傳。八月に握坤哪喇がやって来たと伝えるが、『明實錄』では万曆八

年四月壬子條に記されている。

(69) 詳細は、クリスチャン・ダニエルス「タイ族は国王の系譜をかく描けり ハイ・ロンに対する歴史記憶」(『アジア遊学』六七、二〇〇四年) 参照。

(70) 劉綎の私兵の中には暹羅人などの東南アジア人もおり、朝鮮にも率いられていた。劉綎とその私兵集団について詳しくは、久芳崇「明末における武官統制と火器技術受容―都督劉綎の事例を中心に」(『歴史学研究』八二三、二〇〇七年) 参照。

(71) 『明實錄』万曆十九年五月乙亥條。

(72) 『明史』卷三二五、雲南土司三、緬甸。

(73) 『明實錄』万曆三十二年三月辛丑條。

(74) 『再造藩邦志』卷一。「金應南之回、天子降勅諭。…且諭本國、結暹羅琉球等國、合兵抄擊。」金應南は万曆十九年の聖節使。『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年六月甲寅條でも、同様の指示が下されたことがわかる。

(75) 『朝鮮王朝實錄』宣祖二十五年九月己未條。「其勅文曰、『復勅東南邊海諸鎮、並宣諭琉球暹羅等國、集兵數十萬、同征日本、直擣巢穴。…』」

(76) 管見の限り、実際に琉球、安南の兵を積極的に借りようとした議論は見当たらない。

(77) 卷二、暹羅「國人禮華人甚摯、倍於他夷、眞慕義之國也。」

(78) 卷二、暹羅「暹羅當海內清夷、輒請遣子入學、當屬國雲擾、又請助戰擒倭。夫固二國之優劣也。」

(79) 『海國圖志』卷八、東南洋、暹羅國。

〔謝辞〕 本論文執筆にあたり、多くの方々にお世話になりま

した。この場を借り御礼申し上げます。特に、ご指導くださった大野晃嗣先生、そして面識のない筆者の論文を読み投稿を後押しして下さった石井米雄先生に、感謝申し上げます。本稿に誤りがある場合、その責任は筆者に帰します。

(東北大学大学院国際文化研究科博士前期課程)

訂 正

『東洋学報』第92巻第3号所載

木村可奈子「明の対外政策と冊封国暹羅——万曆朝鮮役における借暹羅兵論を手掛かりに——」

同論文の39（二九一）頁9行目は、

誤：万曆朝鮮役に際しては、鄧鐘に命じて鄧若曾の……

正：万曆朝鮮役に際しては、鄧鐘に命じて鄭若曾の……
となります。